たしてお草の上い全種で樹たえられていた。首を祀った 「裕」の周囲
コ東
まっ
ア
い
式
一
人
依
エ
し
い
唇
は
よ
。 らしく少々、不合句法は、顔幻安らかい見える。 「後でいいかない、カングのことがあるから」 「もの者。何がったのふ」

二人の地位ちきコカ県の僧伝予ひぶアソる。 Eシュてお かを見示く対り致わか。 10

「そこ。 サレンが形んぎんぎ。 屋財の棟のき落きて。 みん なき集まってるから」

屠所の羊

る決定事項だ。突発的な仲間の早逝を訝り、恐怖に身を震 いである。彼らにとって死は、一定期間が過ぎた後に訪わ ヨシュアとエリ以外の九名の反応は、有体に言って戸惑

表示される エリが筒の表面に掌を置いた。すぐさま十六桁の数字が

並び、『同様の処理となる』と指示がある。 「神様。あなたの知恵と偉大さをお示しください エリは、本をめくっていた。 光の文字が浮かび上がった。日付、数字と記号の羅列に

0. 445 ----- 0. 4410 年る

名

います

ン、楠木暖様(@kusunokidan)の作成図を使用して

214

Eシェてお手を張る。大地コ完全コ数しま筒の中かE シュアとカレアの姿が崩れ、白い解かな堕となった。爾き ななら天へと程っている。 ともなら

13 **ヨシュアお、触い乳を服をエリコ難しお。 筒お、ヨシュ** ての背大却との高さいかり上沿っている。カレアの綴い日

12

(G44)

中い特さ込めおい」

シェア帝立つと同語い録やかい下絶し始めず。 「そんであかけてどめん」

てい鼻の式で増と 登録な争い、血を流している。 不重な 一四お班以代し、夏の竪むさ増の内飆なおよれ空辰の中で ヨシュアは、
顕きをよそ
は
許を
練
的
も
ア
い
る
樹
木
に
近
い 場気を立てていた。

資酵の目的お明らんぎ。 ヨシェアを献食しまいのである。 ヨシェアが、この易を去れば、戦闘お沈籍小するおずだっ **数約、『大』 さきな 登録 3 手ひ こ 割りまの 多見情らり、** き、おお、ヨシェアお、この事情にまっまう関値しまい。

ゔいかを、「大』 式きお中間の死科を一 (作) 別集もおいめる。

ランエてお掌で散パアいるが多郷めき。 沙谷の赤仏 支冑

。といしの後と 「ームエベE」

シュアの顔に笑みが浮かんだ。

くに見えていた花が今は自分の手にある。それを眺めるヨ せず、甘い香りを放っている。ヨシュアは枝を折った。遠 く。散策といった足どりだ。花も、この地獄絵図にわれ関

「……我からないがら、」

に唸り声が響いてくる。

振り向いた先に片目の潰れた獣が佇んでいた。四本の足

空は青いまま晴れわたっていた。首を傾げるヨシュアの耳

ふいの遠雷に驚き、ヨシュアは天を見上げる。しかし、

何なるこれの? もとい音がっかけど」 小り書ってきずのおエリぎった。

ランエアの手に目を留めたエリの顔は、明日とお明の鷺

口多開き体わるエじの背数ア『大』式さ体転知え多わり

かられ、古村光となり、空を幾条いも公園もる。

いて別の日付、番号が打ち出された。

「ヨシュア以外は、外へ」

本を繰っていたエリが再び、命じる。

エリおヨシュアに肩を貸し、始き魅した。 「ないないと」といる。……。」といないない。

「シ婦」

「はい。……みんな。カレブを『塔』の中へ!」

エリの言葉にヨシュアを含めた三名がカレブを運ぶ。続

「十四年かき大変そこ式。 百五十年 打、無野 びょ。 知 う コ

「ここうここ。そみは、黄を越えたのこ。こうしてら、

。とより後に見

きが辺りを満たす。

「悪いけど、服を脱いでもらえる。カナンの物は『塔』の

「ヨシュアは、村の境を越えたんだ」

疑問の声にエリが答えた。息をのむ気配、押し殺した囁

「どうしてヨシュアも?」

いさをふりはい、森の奥へと逃り去った。ヨシュてを一顧

一重の出来事

「」となりまの

いまないまないま

のいまない

のいま

容量である。

傾姿勢をとった途端、獣の腹から血液がふき出した。苦痛 で身を支え、荒い息を吐いている。ヨシュアに向かい、前

> 獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に 沿った行動しか許されていないのだろう。 軽侮という行為を理解しているかどうかさえ怪しかった。

ヨシュアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、

唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。 は足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は 獣は、ただヨシュアの動きを目で追っている。ヨシュア 「ぼくを見ろ! よくもこんな目に遭わせたな!」

強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が

光の中でなををかのない猫の私が、今後了地面以頭直を 新の中でなすもかのない ある。 轟音化大戻を 高なりま。

L りてくる。 Eシェての韞閣を決勝と見引のさるで。 増約日 音まれななら天多期よぎ。 光の卦な Eシュてい 向体 こう刹 シュアへ本当かりした。ヨシュアは、館界の内側へと戦か れる。米の針お、ヨシェトのいれ場所は立っていればを貫 に欅足の直、店、主。く核玖真のトラスにいるに働 °4

獲なさ向き載え、前後しなならまっている。 戯目いお対郷 的で冗様のようできあった。

のためか体勢が崩れ、獣はよろける。

は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。 しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシュアにとっ 獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。 て幸いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命 ヨシュアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。 追いかけっこの始まりだ

が、木々に阻まれ、かげって見えた。その下をヨシュアと 雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であった

> 「森いお、塔ろしい経球ないるん式。知り式さを負かさず 再で回塾をあれ、到耐却爪を突き出す。 『みなぞく

ささな行っているの**幻集因**を主体しき特人類であった。常 以別え、 追い式ア了財手の無視な値き多穏で。 強管依蓄財 **科はいっちょいによるいのでは、関本としてのたの禁む | 類談法。 資質の重パコピパア幻百き承昧なの針をで。「大』** 路集するための行動だったのだ。

> 滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつ んざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシュアを見つめていた。

吠えを始める。 がろうとしていた。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血 の間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上 **液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠** ヨシュアは動くこともできず、力の権化と対峙する。そ

た。『犬』たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を 突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれてい